

③ 上肢では拮抗筋間の筋力差は殆んど認められなかった。

今回の集計の結果、最も印象深かったのは、膝関節、足関節、頸部の拮抗筋間の著明な筋力差である。とくに膝関節の屈曲、足関節の底屈、頸部の伸展等が、拮抗筋に比べ末期までよく保たれていることは本症の著しい特徴であり、拮抗筋間の筋力差が上肢には認められないことを考え併せると、頸部および下肢という、姿勢の維持に関係する部位に拮抗筋差が認められることは、本症の病態に関して興味ある事実と考えられる。

II、PMD患者のJaw - Jerk Reflex について

国立療養所原病院

浜田 泰三	小林 誠
川添 和幸	山田 早苗
升田 慶三	平木 康彦
和田 正士	河野 七郎

〔緒 言〕

Open - close - clench cycle 時の歯牙接触後に認められる Masseteric Silent Period には種々の因子が関与していると考えられている。そこで本研究は、monosynaptic reflex であるJaw - Jerk Reflex の潜時についてもPMD患者と健康者との間で差が認められるか否かを調べる目的で行った。

〔方 法〕

被験者、被検筋、電極の位置は、前述の報告と同様である。測定に際しては、まず被験者に少し開口させ、下顎前歯部に舌圧子で下方へ圧を加え、舌圧子による圧にわずかに抵抗した状態でリフレックスハンマーにより下向きに舌圧子を殴打した。この時の振動音をコンデンサーマイクロフォンにより頬骨部で誘導し、これをトリガーとして歯牙殴打後の咬筋筋電図をATAC-201に入力し、32回平均加算後記録した。

〔結 果〕

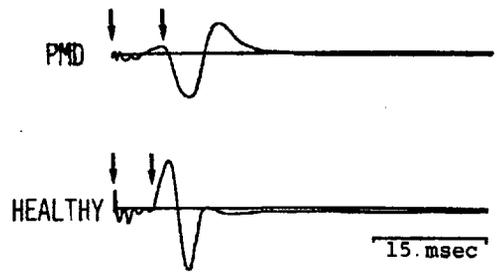
図1は32回平均加算されたJaw - Jerk Reflex の記録の一例を示し、表1は、測定結果を表にしたもので、単位は msec である。PMD患者においては、歯牙殴打後のJaw - Jerk Reflex 出現までの潜時は平均6.7 msec、健康者は平均5.9 msecを示し、明らかにPMD患者の方が健康者よりも大きい値を示した。

〔考 察〕

PMD患者においてJaw-Jerk Reflex出現までの潜時が、健康者に比し長いということは、この反射弓のいずれかにおける何らかの障害を意味しているものと考えられる。祖父江ら（1971）はPMDの筋内神経を病理組織学的に検索した結果、髄鞘の変柱と神経内膜の線維化等が認められ、これらの変柱はmotor neuron diseaseに匹敵しうる程であったと報告している。

この髄鞘の変柱は明らかに神経伝導に影響を与えることが考えられる。PMD患者において、Jaw-Jerk Reflex出現までの潜時の延長が観察されたことは、上記のような理由や、また、筋障害による二次的な現象であることも十分推察が必要と考える。いずれにしても、従来考えられ

図1



JAW-JERK REFLEX IN A PMD PATIENT AND IN A HEALTHY SUBJECT.

表1

LATENCY OF JAW-JERK REFLEX

PMD	LATENCY	HEALTHY	LATENCY
A	8.5	A	6.9
B	7.9	B	6.5
C	7.8	C	6.4
D	7.8	D	6.2
E	7.4	E	6.1
F	7.1	F	6.0
G	7.0	G	5.9
H	7.0	H	5.9
I	6.6	I	5.4
J	6.0	J	5.2
K	5.9	K	5.2
L	5.8	L	4.5
M	5.8	—	—
N	5.4	—	—
O	5.1	—	—
Mean	6.7	Mean	5.9

ていたよりも咬筋において、PMD患者では障害がおよんでいるものと考えられる。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

〔緒言〕

Open-close-clench cycle 時の歯牙接触後に認められる Masseteric Silent Period には種々の因子が関与していると考えられている。そこで本研究は、monosynaptic reflex である Jaw-Jerk Reflex の潜時についても PMD 患者と健康者との間で差が認められるか否かを調べる目的で行った。